

中国河南省で実施した水稲栽培支援

埼玉県東松山農林振興センター担当部長 畠山 修一

建設ラッシュの裏側で

河南省は中国最大の人口、約9,869万人を擁する歴史ある地域です。また同省開封市は北宋時代の都として栄え、「東京」とも呼ばれていました。当時の様子を再現した街づくりは、埼玉県川越市の蔵造りの景観形成にとってもよく似ていると感じました。そんな古都のイメージを大切にしている一方で、市街のここかしこに高層マンションが競うように建設されているのが印象的でした。

その開封市の中心部から東へ約25kmのところにある「馬尾村」に、2014年6月25日～28日の日程で、水稲栽培支援の要請を受け行って参りました。

馬尾村は若者が都会へ流出し高齢化で人手がなくなってきた



建設ラッシュの高層マンション



農村の風景

ことから、水稲栽培の効率化や省力化を目指し、4～5年前に田植機の導入を始めました。しかし思うような成果が挙げられませんでした。

その理由の第一は、機械化に伴う水稲の育苗技術に関する知見が乏しかったからです。

対話から見えてきた課題

派遣に先立っていただいた、馬尾村が希望している指導内容は次のとおりでした。

① 健苗育成の方法、苗の発芽揃いを良くする方法、

育苗培土の選択および作り方

- ② 機械田植えにおける時期別の水管理、肥培管理
- ③ 病害虫防除技術の向上、特に黒すじ萎縮病、縞葉枯病、馬鹿苗病

実際に現地へ赴き、現場を見て情報交換をした結果、以下のような課題が見えてきました。

- ① 発芽を揃えるための前処理が不十分
- ② 市販の育苗培土が高価なため、自分たちで培土を作りたいが、育苗に適した酸性の土がない
- ③ 育苗箱の種類と播種量、育苗日数があっていない
- ④ 田植えが超密植でかつステージ別の水管理をしていないため過繁茂となり、病害が発生しやすい
- ⑤ 作付体系が縞葉枯病と黒すじ萎縮病のウイルスを媒介する害虫「ヒメトビウンカ」の生息に適しているのに、抵抗性品種が使われていない



情報交換の様子

稲作のふるさとへの恩返し

前述の情報交換で得られた課題をもとに、プレゼン用の資料を作成し講義に臨みました。

滞在3日目の朝。陸続と集まってくる地元の方々。スライドを見つめる真剣な眼差し。ひと言たりとも聞きもらすまいと忙しくメモを取るその姿。

ヨウ素でんぷん反応を利用した施肥技術や病害虫の診断方法、収量に影響が出る病害虫の被害水準、抵抗性品種の利用、細かい水管理、品質に配慮した収穫時期の決定や乾燥調製技術など、生理生態を細かく分析し組み立てた日本の稲作技術に

対し、強い関心を持っていただくことができました。

思えばイネの栽培起源が中国の香港・マカオに注ぐ珠江中流域である



熱心に聴講する地元の方々

と、中日両国の研究チームによって判明したのは数年前のこと。稲作のふるさとにこんな形で恩返しできたことに胸が熱くなりました。

「あなたとお友達に」

今回の派遣受け入れに尽力くださった方の一人、郭广义さんが情報交換の際、最初に語られた言葉が今もって忘れられません。

「中国と日本は同じ漢字を使う国なのだからもっと仲良くすべきです。私はあなたとお友達になりたい」

すかさず私は応じ、右手を差し出しました。

「もうお友達です」

そのとき、郭さんの顔に満面の笑みが浮かびました。きっと今回の派遣の一番の収穫は、小さいながらもこうした人間交流の第一歩が記せたことだと思います。

通訳でお世話になった馮君垂さん。河南大学外国語学院日語系で教鞭を執られる先生です。今回の件で市にお勤めのご主人の同僚から、適当な学生を通訳として推薦してほしいとの依頼があったそうです。しかし試験期間中の学生に苦勞をかけるくらいなら自分がやると買って出たとのこと。開封市の歴史や文化、風習など、通訳の仕事の枠



郭广义さん(右)と私(左)

を超えてさまざまな情報を提供してくれました。短い滞在期間にもかかわらず、心を開いて中国の人たちと交流できたのは、なによりも彼女のおかげです。その上、聴講者からの要望に応え、私の日本語のプレゼン資料を中国語に翻訳することにもなりました。

また滞在した4日間、出迎えから最後の見送りまで随行してくれた郭继敏さん。開封市外国專家局で農業技術者の受け入れを担当されているとのこと。その気配り、おもてなしぶりには頭が下がりました。馬尾村から市内への帰路、開封市の名所へと私を案内し、食事の折には終始、口にあうかを気遣われ、私がおいしいと太鼓判を押した地元のスイカは、一皿分、お持ち帰り用にと取り分けてくれました。ホテルの出発時間が早かった最後の日、朝食代わりに用意してくれたパンと牛乳の味は格別でした。

馬尾村党支部書記を務め、現地で受け入れの中心者としてお世話をしてくれた孙林河さん。ほ場案内のあと「農村の料理をごちそうする」と、黄河のほとり、回族の村にポツンとある肉料理屋に案内してくれました。その際、用意されたのが酒の神「杜康」の名を冠した白酒。三国志の英雄、曹操が詩に詠み込んだという伝説の酒がテーブルに。アルコール度数の高さが歓迎の度合いを表すとか。50度のボトルが2本用意され、歓談のひとつときもたれました。

最後に表敬訪問した開封市外国專家局の张树东局長。来日経験があり日本のお米はとてもおいしかったと開口一番。日本で学んだ一村一品運動を開封市でも展開したいと、私の訪問中に、フランスからワインのソムリエを招聘し、技術を学ぶ機会も作っていました。その局長、部下の郭继敏さんから、私の講義を聴講した技術者より「今度はトマトの指導に来てほしい」との要望があったことを聞き、来年もまた指導に来てくれないかと、何度も何度も熱い要請をくださいました。

大きな、大きな国、中国は、私たちが思っているより人なつこく、謙虚で熱心な、心温まる素晴らしい国でした。このような機会を作ってくださいました関係者の皆様に心から感謝いたします。